明治十五年十月一日、開成山でせい大に疏水通水式が行われました。久敬は、ひと目見たくて近くの疏水路に足をはこびました。「水がきたぞー、水がきたぞー」と田んぼにいた農民たちがさけびました。

水はほとばしるように疏水路に流れ、田んぼに入っていきました。久敬は、この日このときを長年待っていました。この水は、郡山や安積の村々ばかりでなく、やがて須賀川の方まで流れるのもそう遠くはないと思いながら、じっと水路をみつめていました。

それからちょうど二年がすぎました。ある日、久敬は、一通の電報を受けとりました。それは、思わざる恩賞の知らせでした。十月一日の通水記念日に宮内省から銀杯一組が与えられることになったのです、

久敬は、いつまでも電報をにぎりしめていました。久敬の長い間の苦労が、ようやく政府によって認められたのです、しかし、そのよろこびを離別していた妻や子供たちには分けてやることはできませんでした。